

## 資料

日本語-手話同時通訳に関する文献的考察  
—音声同時通訳研究との比較から—

白澤麻弓\*・斎藤佐和\*\*

手話通訳に関する研究の多くは、通訳の結果、つまり手話の特徴や受け手の反応を研究対象としてきた。本研究では、手話通訳の過程に焦点をあて、音声同時通訳における研究と対比しながら、手話通訳中に行われている作業について文献的に考察した。

この結果、手話通訳においても、言い換えや付加などの作業や、日本語から手話へ翻訳する際の処理単位の違いといった音声同時通訳に類似した特徴が指摘され、同様の手法を用いて研究ができることが推察された。しかしながら、日本語対応手話の存在や空間モダリティーの活用といった手話独自の特徴については未だ十分な研究が行われておらず、こうした特徴を視野に入れた研究の必要性が示唆された。

キー・ワード：手話通訳 音声同時通訳 通訳作業 聴覚障害

## I. はじめに

手話通訳に関する研究には、これまで手話通訳の評価や養成カリキュラムに関する研究 (Strong & Rudser, 1986<sup>54</sup>) ; Rudser, 1986<sup>46</sup>) ; Brasel & Brasel, 1974<sup>6</sup>) ; Riekehof, 1974<sup>45</sup>) など、手話通訳者の備えるべき能力に関する研究 (Brasel, Montanelli, & Quigley, 1974<sup>7</sup>) ; Rudser & Strong, 1986<sup>47</sup>) ; Taylor & Elliot, 1994<sup>57</sup>) など、通訳の伝達効果を高める条件に関する研究 (Fleischer & Cottrell, 1976<sup>12</sup>) ; Murphy & Fleischer, 1976<sup>33</sup>) ; Livingston, Singer, & Abrahamson, 1994<sup>29</sup>) など)、通訳者の誤りやその結果生じるミスコミュニケーションに関する研究 (Jhonson, 1991<sup>20</sup>) など) などがなされてきた。

Murphy and Fleischer (1976<sup>33</sup>) は、高等教育機関における手話通訳について検討するために、ASL (American Sign Language) と SE

(Signed English, 英語対応手話) の有効性について比較し、受け手である聴覚障害学生で、たとえ SE による通訳を好むとした者であっても、ASL による通訳を受けた場合の方が、内容に対する理解度が高く、すべての聴覚障害学生にとって ASL 通訳が有効であることを主張している。同時に Fleischer and Cottrell (1976<sup>12</sup>) は、被通訳者の、話題の内容に関する知識の量が異なる場合であっても、同様の結果が得られたことを指摘し、Livingston, Singer, and Abrahamson (1994<sup>29</sup>) も、これを検証している。

しかしこうした研究は、通訳の結果、すなわち手話通訳者によって訳出された手話や、これに対する被通訳者の反応のみが分析対象とされており、実際に手話通訳者によってどのような作業が加えられていたのか、手話通訳に含まれるどのような作業が被通訳者の反応に影響を与えているのかといった、通訳者の行っている作業そのものに対する検討がなされていない (Cokely, 1992<sup>10</sup>) 。

一方、全日本聾啞連盟 (1985<sup>65</sup>, 1988<sup>67</sup>),

\*筑波大学心身障害学研究所

\*\*筑波大学心身障害学系

1986<sup>66)</sup>、1998<sup>65)</sup>) および日本手話通訳士協会 (1994<sup>40)</sup>) は、現在の手話通訳環境が量的にも質的にも不十分であることを指摘し、この原因として、これまで手話通訳の養成が通訳ではなく手話の学習に焦点をあててきたこと、そのために通訳者としての訓練は、個人の経験と努力にゆだねられてきたことを挙げるとともに、今後の手話通訳の質的向上、および量的拡大のためにも、手話通訳の作業内容に関する実践分析の必要性を強調している。

そこで本研究では、音声から手話への同時通訳について、これまで注目されてこなかった通訳作業の内容に焦点をあて文献的考察を行う。ただし、手話通訳の通訳作業については研究の蓄積が少なく、十分な資料が存在しないため、まず、音声同時通訳の文献資料をもとに、通訳者の行っている作業について考察し、これをふまえて手話通訳に関する研究を概観し、手話通訳研究の今後の方向性について考察することとする。

## II. 音声同時通訳に関する研究

音声同時通訳に関する研究は、1960年初頭から1970年代を中心に、主に実験心理学者の手によってなされてきた (Davidson, 1992<sup>11)</sup>; 水野, 1997<sup>32)</sup>)。近年は、通訳者自身による研究も増え、研究分野も通訳そのものから、通訳者の養成 (ビュテル延増, 1997<sup>8)</sup>; 西村, 1996<sup>41)</sup>; 新崎, 1996<sup>39)</sup>; 鳥飼, 1996<sup>56)</sup>) など、認定や外国語教育への応用など (染谷, 1996 a<sup>51)</sup>; 染谷, 1996 b<sup>52)</sup>; 永田, 1996<sup>35)</sup>) など、より実践的方向へと広がりを見せている (Davidson, 1992<sup>11)</sup>)。ここでは、手話通訳作業の分析のための手がかりを得るため、音声同時通訳に関する研究の中から、特に同時通訳を実証的に分析したものを取り上げ、この中で用いられている分析指標について検討するとともに、その結果明らかになった同時通訳の特徴について、「量的側面」「時間的側面」「起点言語から目標言語への変換作業」「訳出表現」の4つの側面から記述する。

### 1. 通訳作業の量的側面の分析

同時通訳の量的側面に関する分析では、通訳者によって訳出された語の語数や音節数、あるいは通訳者が通訳対象となる談話 (以下「起点談話」とする) のうち通訳者によって訳出された部分の比率 (以下「訳出率」とする) などが取り上げられており、特に訳出率の算出方法については、何を指標とするかについて議論がなされている。

Gerver (1971<sup>13)</sup>) は、フランス語-英語間の同時通訳について、起点談話を単語ごとに区切り、このうち目標言語 (通訳における産出言語) に訳出されているものの比率を訳出率として表すとともに、起点談話の速さと訳出率の関係について分析し、訳出率は起点談話のスピードが速くなるほど減少することを明らかにしている。しかしながら、語を分析単位とするこの方法は、基本的な言語構造が類似しているヨーロッパ言語間の通訳の分析としては適当であるが、助詞や助動詞が重要な役割を担っている日本語と、そのような語の存在しない英語など、言語構造が大きく異なる2言語間の通訳においては適用しにくいと考えられる。

一方、木佐 (1997<sup>24)</sup>; 1998<sup>25)</sup>; 1999<sup>26)</sup>) は、海外のテレビ放送を通訳を通して伝える英語-日本語間の「放送通訳」を取り上げ、拍数 (音節数) を指標として訳出率の算出を試みている。彼は、起点談話の元になった原稿を一定のルール (①通訳と同じく、「です」「ます」調を基本とする。②日本語として不自然にならない範囲でなるべく簡潔な直訳を心がけるなど) に基づいて直訳し、この訳文の拍数に対する通訳者の訳出の拍数の比率を訳出率としている。しかしながら、木佐自身も述べているように、この拍数による比較では、通訳者によって伝えられた情報の質や量については検討されず、起点談話の中の同じ単語を訳出していても、これに対する訳語として拍数の大きい語を用いることで、訳出率が大きくなるという問題点が存在する。

これに対して小栗山 (2000<sup>27)</sup>) は、木佐 (1999<sup>26)</sup>) を批判的に検討し、特に通訳によって

伝達された情報の量に焦点をあて、これを反映するための訳出率の算出方法について提案している。ここでは、起点談話を、情報伝達の重要な要素とされる「5W1H」(① who (誰が)、② what (何を)、③ when (いつ)、④ where (どこで)、⑤ why (なぜ)、⑥ how (どうやって))に区切り、①から⑤のそれぞれが訳出の中に再現されているかどうかによって全体の訳出率を求めている。この結果、前もって通訳の原稿が存在し、ある程度訳出の準備を行うことができる時差通訳の場合、全体の訳出率が平均 72.9% であるのに対して、時差通訳と同様の起点談話を原稿のない状態で即座に通訳した場合では 44.5%、同様に事前に原稿を読むことができない場合でも、話し手が原稿を読まずにその場で話す自然発話場面では 72.3% と、時差通訳と同等の値を示すことなどが明らかになっている。

水野(1993<sup>30)</sup>)は、訳出率と受け手にとっての「わかりやすさ」の関係について、起点談話に忠実であろうとすればするほど、訳出語数が多くなったり、目標言語として不自然な文になるなど、受け手にとってはわかりにくい通訳になってしまうという矛盾を指摘している。このことから、訳出率の算出にあたっては、起点談話との1対1の形式的な対応だけを求めるのではなく、小栗山(2000<sup>27)</sup>)のように実質的な意味や内容がどの程度伝達されているかを反映することが重要である。さらに、岡野(1999<sup>44)</sup>)は、起点談話には受け手にとって重要な情報と重要度の低い情報が存在するため、より重要な情報を脱落せずに再現できているかといった、質的な側面についても検討することの必要性を指摘しており、この点についても今後検討が必要であると言える。

## 2. 通訳作業の時間的側面の分析

同時通訳を時間的側面から分析した研究としては、①起点談話が通訳者に聞こえ始めてから、目標言語が産出されるまでの時間的な遅れである「タイムラグ」を中心に、同時通訳の処理単位について検討したものと、②起点談話の入力と訳出表現の産出の時間的な関係から、同時通

訳における聴取と産出の同時性について分析したものの大きく二つがあげられる。

### 1) 処理単位

同時通訳の処理単位、つまり継続的に入力される起点談話を、通訳者がどのように切り分けて訳出するのか、またその際に何が手がかりにされているのかを明らかにしようとした研究として、Barik(1969<sup>2)</sup>)がある。Barik(1969<sup>2)</sup>)は、起点談話を5秒間隔で区切り、それぞれの区間の最後に出現している単語が、訳出表現中のどこに現れているかを調べ、両者のタイムラグをストップウォッチで計測し、この大きさや推移について分析している。この結果、起点談話と訳出の間のタイムラグは、職業として通訳を行っている通訳者の場合で1.29秒から3.80秒であり、起点談話に含まれる間(以下「ポーズ」とする)を手がかりとして、ポーズの直前までをひとまとまりに訳出を行っていると報告している。

また、Gerver(1971<sup>13)</sup>)は、通訳者が起点談話を切り分ける際に用いる手がかりをさらに明確にするため、通常の談話と抑揚やポーズを人為的に取り除いた談話を作成し、これらに対する同時通訳の訳出結果を比較している。ここから、いずれの通訳者も通常の談話の方がより正確な訳出が可能であり、また抑揚やポーズを削った題材であっても、通訳者は意識的にポーズを作り出していることから、起点談話のポーズや抑揚が起点談話の切り分けや解釈、訳出に貢献していると述べている。

同様にGoldman-Eisler(1972<sup>15)</sup>)は、タイムラグが起点談話の平均4語から5語に対応していたこと、これは起点談話のポーズで区切られた1単位(節や文)にあたることから、ポーズを手掛かりに意味単位を検出し、これをもとに訳出しているのではないかと主張している。

一方、同時通訳の処理単位については、訳出する文章や内容によって個人内の変動があったり、通訳者のとる訳出上の方略によって差が生じることも明らかにされている。

永田(1997 a<sup>36)</sup>)は、同じ通訳者の訳出の中で

も、段落の冒頭で話題を提示する部分(「これがなぜ問題かという」と)などは、即座に訳出されることが多く、逆に抽象的でわかりにくい内容を訳出するときには、通訳に深い処理が必要であるため、タイムラグが大きくなることを報告している。

また、亀井(1998<sup>21)</sup>)は、通訳者の中には、タイムラグを大きくとって句や節などの単位で目標言語に変換する者や、語対応で直訳的に訳出していく者など、処理単位の大きさの違いによっていくつかの方略が存在することを指摘している。

以上のことから、①同時通訳の際には起点談話のポーズや抑揚を手がかりに、節や文などの意味単位を検出し、これをひとまとまりとして訳出を行っていること、②このような処理単位には、訳出しようとする文章の内容や通訳者の取る方略によって、個人内および個人間の変動があること、③処理単位の分析指標としてタイムラグが有効であるが、単に起点談話の入力と訳出の時間的な差のみではなく、起点談話の内容やそれに対する通訳者の訳出についてもあわせて分析する必要があることがわかる。

## 2) 聴取と産出の同時性

時間的側面の分析から得られるもうひとつの知見として、起点談話の聴取と訳出表現の産出という二つの課題に対して、どのように注意を分配しているのかという問題が挙げられる。

これについて Barik (1973 a<sup>4)</sup>) は、同時通訳者は聴取と産出を同時に行う負荷を避けるため、起点談話のポーズを利用して、この間に訳出表現の産出を終えるよう工夫しているのではないかという仮説を立て、分析によってこれを証明している。

ところが Gerber (1971<sup>13)</sup>) は、英語からフランス語への同時通訳の分析から、いずれの通訳者も全体を通して一定の速さで訳出を行っており、起点談話の聴取と訳出の産出が同時に出現している部分でも、訳の正確さは変化しないことから、聴取と同時に産出することが、必ずしも同時通訳の結果に影響しないと指摘してい

る。

実際の同時通訳の訓練においては、聞くことと訳すことの両方に同時に注意を向けることが重視されることが多く、一般的には Gerber の主張が受け入れられていると考えられる。

そうした中で Gile (1994<sup>14)</sup>) は、日本語から英語への同時通訳の方略について、日本語には「～ということになります」「～ではないかと思えます」など、新たな意味情報をほとんど加えることのない文末が、何文節にもわたって付加される傾向があることを指摘し、これを「予測可能文末 (PSEs; Predictable Sentence Endings)」として、PSEs が通訳者にとっての情報の休止 (Informational Pause) になり得ると主張している。すなわち、日本語にかなりの頻度で出現する PSEs の間は、表面上は聴取と訳出表現の産出を同時に行っているように見えても、実質的には起点談話の聴取に分配される注意の割合はかなり低く、訳出表現の産出が中心になるのではないかと主張される。

このことから、聴取と産出の同時性については、単純に起点談話の入力や訳出表現の産出の有無のみならず、意味的な側面からもさらに検討が必要であると言える。

## 3. 起点言語から目標言語への変換作業

起点言語から目標言語に変換する際、通訳者によって行われている作業について取り上げた研究には、主に語レベルで起点談話に含まれる語が訳出表現内でどのように訳出されたかを比較分析するものと、文や句のレベルで構文の変化を調べるものの二つがあげられる。

### 3) 語レベルの分析

Barik (1971<sup>3)</sup>; 1973 b<sup>5)</sup>) は、起点談話と通訳者の訳出表現を語レベルで比較し、訳出表現内には本来通訳されるべき語の脱落や、起点談話にはない語の付加、あるいは語の置換など、起点談話の表現とは異なる箇所が存在することを指摘し、これを起点談話からの離脱つまり訳出上の誤りと位置付け、出現頻度や原因について分析している。

これに対して近藤(1994<sup>20)</sup>)は、通訳中に生じ

る脱落や付加、置換の中には、言語から言語への変換の都合上必要なものもあり得るとし、これらをすべて誤りと位置付ける Barik の考え方を批判している。

同様に永田(1994<sup>34)</sup>、1997 a<sup>36)</sup>は、訳出表現と起点談話の間に生じる差異の多くが、起点言語と目標言語の間の非等価性を解決するために通訳者が用いている方略の現れであると主張し、その上で、同時通訳に必要な変換作業として、「言い換え」「加訳」「解説と訳注」「減訳」などを挙げ、実際の日本語-中国語同時通訳の事例から、このような操作が行われている箇所を抽出して、前後の訳出表現や対応する起点談話の内容から、その出現理由や原因について考察している。

同じように亀井(1998<sup>21)</sup>も、同時通訳におけるこうした作業の必要性をうたえたと共に、実際の同時通訳の分析から、職業的に通訳を行っている通訳者は、省略や付加、言い換えといった操作を、訳出表現をよりわかりやすくするために効果的に用いているのに対して、通訳の訓練生の場合は、訳出の遅れから生じる脱落や、訳語が思い浮かばないことによる語の言い換えなど、通訳が十分にできないためにこのような操作が生じてしまう場合があることを報告している。

さらに、岡野(1999<sup>44)</sup>は、言語間の語彙範疇の違いによる調整だけではなく、通訳の受け手の聞き取りやすさのためにも、減訳が重要であり、むしろ積極的に活用しなければいけないという考え方を示しており、こうした語レベルの操作が同時通訳にどのように貢献しているのかさらなる分析が必要であると言える。

#### 4) 文レベルの分析

同時通訳の文レベルの変換作業については、起点談話と訳出表現の比較から、起点言語から目標言語に変換する際、語順の入れ替えや文の分割・統合、構文の転換などが生じていることが事例的に報告されている。

具体的には、起点談話の1文を分割して2つの文として訳出したり、逆に2つの短い文を1

文にまとめて簡潔に表現する(Nishio, 1986<sup>42)</sup>; 亀井, 1998<sup>21)</sup>など)、主語と目的語を入れ替えて訳出する(Nishio, 1986<sup>42)</sup>; 永田, 1997 a<sup>36)</sup>など)、起点談話で述部がなかなか表示されない場合に副詞句を用いて文頭から切り分けながら訳出する(Nishio, 1986<sup>42)</sup>; 水野, 1993<sup>30)</sup>、1995<sup>31)</sup> 船山, 1985<sup>17)</sup>; 八島, 1985<sup>64)</sup>など)などである。

また、文レベルの変換作業は起点言語と目標言語の組み合わせによっても変化し、特に述部が文末に表れる日本語が起点言語となる場合、動詞の予測を可能にする手がかかり(かかりうけの法則(佐伯, 1975<sup>40)</sup>、など)をもちいて動詞を先取りして訳出し、その後展開にあわせて調整したり、逆に動詞の訳出を文末まで遅らせるために起点談話を文頭から副詞句として訳出するなどの例が報告されている(水野, 1993<sup>30)</sup>; 1995<sup>31)</sup>)。

しかしながら、いずれの研究もこうした操作が行われていることを事例的に報告するにとどまっており、より詳細かつ系統的な分析はなされていない。永田(1997 a<sup>36)</sup>)は、以上に挙げた文レベルの操作の例は、いずれも極度の時間的な制約の下、文全体を聞き終えないうちに入力される起点談話を継時的に処理しなければならないという同時通訳の特徴を反映したものであるとしている。そのため、翻訳や逐次通訳とは異なる同時通訳の特徴をより詳細に明らかにするためにも、こうした操作の出現位置や出現頻度、あるいはこれらを誘発する文脈の分析、通訳者ごとの共通点および相違点の分析といった、より多面的な研究が必要であると考えられる。

#### 4. 訳出表現の分析

同時通訳の結果、通訳者によって産出された訳出表現について永田(1997 b<sup>37)</sup>)は、同じ起点談話を複数の通訳者が同時通訳した結果を比較し、「Ah-」「u-m」といった母音の引きずりや冗語、発音不明瞭、不自然な間、速さの極端な変化等が同時通訳を聞きにくくする要因となっていることを指摘している。

また、岡野(1999<sup>44)</sup>)は、同時通訳の「わかり

やすさ」を構成する要素として、①論理構造が明確なこと、②同音異義語などほかの言葉に聞き間違えるような箇所が少ないこと、③受け手にとって情報処理が容易であることの3点を挙げ、さらに「聞きやすさ」に関わる要素として、イントネーション、アクセント、発声、音質といった「音声表現の技術」の重要性を指摘している。

このような各側面から、実際の同時通訳者の訳出表現を分析的に研究したものは少ないが、NHK放送文化研究所は、特に訳出表現の発話速度の側面から、同時通訳を分析するとともに、大規模な受け手調査を行い、客観的評価と通訳の受け手の反応の関係について分析している(木佐, 1997<sup>24)</sup>; 1999<sup>26)</sup>)。この結果、同時通訳者の発話速度は、通常のNHKアナウンサーがニュースを読み上げる平均発話速度よりいずれも早く、通訳者によってはかなり早口になる者もいること、受け手の発話速度に対する感じ方はほぼ正確に発話速度を反映しており、訳出表現が速くなればなるほど聞きにくいと感じる人が増えること、さらに、訳出表現中の聞き取りにくい箇所は、いずれも訳出の発話速度が速くなればなるほど「気になる」とする人の割合が増えることなどが明らかになっている。

しかし、ここで取り上げられたスピードは訳出表現の1側面に過ぎず、今後さらに多方面から、特に受け手の評価との関係で分析を進めていく必要があると考えられる。

### III. 手話通訳に関する研究

目標言語に手話を用いる手話通訳について、音声同時通訳の場合と同様に「量的側面」「時間的側面」「変換作業」「訳出表現」の4つの側面からこれまでの研究を概観する。

#### 1. 手話通訳作業の量的側面の分析

若松(1989 a<sup>59)</sup>, 1989 b<sup>60)</sup>)は、大学の講義における手話通訳について、講義者の話した起点談話と2名の手話通訳者による訳出表現、およびこれを読み取り通訳(逆通訳)を通して日本語に変換したものの3つのデータを比較するこ

とで、手話通訳の訳出語数および訳出率について分析している。この結果、手話による訳出語数は通訳者間でほぼ同一であり、起点談話と読み取り通訳による訳出を比較して求めた訳出率は、講義全体と比較した場合で40%程度、冗語や反復表現を除き文章を整理した状態では60%程度、各文章の内容を伝えるために必要な用語を取り出しその一致率を産出したところ80%程度となったとしている。また、起点談話と読み取り通訳の訳出の不一致を品詞別に集計したところ、助詞、助動詞の一致が相対的に低く、名詞、動詞の一致率が相対的に高くなったことから、手話通訳において助詞、助動詞を正確に伝達することの難しさが指摘されている。

しかしながら、若松自身も述べているように、この研究では大学講義をいかに忠実に手話によって視覚化するかという点に主眼をおいているため、起点談話と手話の間に厳密な一致を求めるなど、手話通訳の評価としては不自然な指標が用いられている。また、空間利用や同時結合、非手指動作といった手話における重要な要素についても分析されていないという点で問題が残る。

#### 2. 手話通訳作業の時間的側面の分析

音声言語から手話への同時通訳を時間的側面から分析したものとして、若松(1990 a<sup>59)</sup>)は、講義を手話に変換し、その手話を読み取って日本語へ変換する時の、それぞれの通訳のタイムラグについて分析している。ここでは、起点談話を訳出された手話単語に対応させて区切り、起点談話が発声されてから対応する手話表現が開始されるまでのタイムラグを測定したところ、平均が1.3秒であったという。この中にはタイムラグが0秒から0.5秒と極端に短い箇所も検出され、日本語に対応した表現で自動的に表出している部分や、音声同時通訳でも指摘されている意味の先取りがあることが認められた。

一方、若松(1990 b<sup>62)</sup>)では、手話通訳の情報処理機構について検討するため、聴取された語と産出された語の関係から、通訳者の短期記憶

の中に保存されている語の量を分析している。この結果、語の保存量は平均で2語、最大は6語程度であり、単語の中には、一定期間保存されてから出力されるものと、保存されずに即座に出力されるものの2種類があることから、通訳者はこれら二つの方略を即座に選択しながら訳出していると推察している。また、起点談話の発話速度が上がり、一秒間に3語以上の発話通訳者に入力されるようになると、これらを即時に訳出していくことができなくなり、保存型方略が採用されるようになること、さらに保存型方略を用いている部分では、冗語や重複表現が整理された形で訳出が行われていることなどが報告されている。

また、Cokely (1986<sup>9)</sup>; 1992<sup>10)</sup> は、音声同時通訳における研究成果を手話通訳に応用し、主にタイムラグと通訳上の誤りの関係を通して、手話通訳におけるより詳細な通訳過程の分析を行っている。ここでは、タイムラグが大きくなるほど通訳者の通訳上の誤りが減少することから、タイムラグの大きい手話通訳者ほど、聞いて訳出するまでの間に深い処理を行っているのではないかとの主張をしている。

以上の結果から、手話通訳の時間的側面については、音声同時通訳と比較してタイムラグが若干短いこと、および音声同時通訳と同様、処理単位の異なる二つの方略が存在することが指摘される。

### 3. 起点言語から目標言語への変換作業

起点言語から目標言語に変換する際に生じている変化について、Cokely (1992<sup>10)</sup> は、英語からASLの同時通訳について分析し、起点言語から目標言語に変換する際に生じる誤りのタイプとして、必要な情報が訳出されない「省略 (omissions)」、起点言語テキストに含まれていない情報が付け加えられる「付加 (additions)」、起点言語から目標言語へ適切に変換されずに意味のずれが生じてしまう「置換 (substitutions)」、起点言語である英語の影響でASLでは通常受け入れられない表現となる「侵入 (intrusions)」、その他の意味の通らない表現

や通訳上の誤りなどを含む「異常 (anomalies)」の5つをあげ、それぞれの出現頻度や誤り方の特徴について分析している。

これらの操作は通訳上必要な言語間の調整ではなく、通訳上の誤りと位置付けているが、音声同時通訳の研究成果から考えると、手話通訳の場合にも、これらが誤りとなる場合と通訳者が能動的に行う場合があると考えられ、そのような視点からの再検討が必要であると言える。

また、通訳作業とは質が異なるが、小田(1987)は、手話通訳者の手話を題材として取り上げ、分析することで、日本語と手話の対照分析を行い、両者の相違点について分析している。この結果、手話では動詞を示す単語の運動を変化させることで、継続や程度を示す意味が付加されることや(例:「ずっと立ちっぱなし」という日本語に対して、「立つ」に継続相を示す運動を付加して表示する)、主語や目的語を、空間を用いて表すことができること(例:「彼に言われた」という日本語を「言う」という手話の運動の起点と終点の位置を変化させることで示す)、などが明らかになっている。これらはいずれも要素を同時に結合することができる空間モダリティの特徴があらわれたものであるが、手話通訳の際にこのような手話の特徴がどのように変換作業に影響しているのかについても、さらに分析が必要であると考えられる。

### 4. 訳出表現の分析

Shaw (1992<sup>50)</sup> は、ASLから英語への同時通訳の訳出表現について、発声時間、間の取り方、統語構造、イントネーション、語彙の選択の5つの側面から分析を行っている。この結果、通訳者の訳出は、起点談話の違いによってスピードや発音の明瞭さ、統語構造の複雑さが変化すること、通訳者によっては間が大きくなったり、文頭の言い直し、不自然なイントネーションなどが見られることを明らかにしている。

また、若松(1991<sup>63)</sup> は、起点言語から目標言語に変換する際に、起点談話を聞いて即座に訳出するのではなく、一定時間入力情報を保存して訳出する通訳者の方が、手話が安定的に表示

されており、即時に通訳する通訳者の場合、訳出表現が起点言語の速さによって変動し、手話の表出間隔にばらつきが生じていたとしている。この点では Cokely (1992<sup>10)</sup>) も、タイムラグの大きな通訳者ほど、目標言語として流暢な ASL が産出できていたと指摘している。

このような訳出表現の違いは、受け手の通訳に対する評価に直接的に影響するものと考えられる。特に手話通訳の特徴として、音声同時通訳以上に受け手である聴覚障害者のコミュニケーション手段に幅があることが指摘されており、個々の聴覚障害者のコミュニケーションニーズとの関係で、さらに検討を深める必要がある。

一方、手話通訳者をはじめとする、第二言語として手話を学んでいる手話学習者の手話を分析した研究として、竹内・木村・池田・福田・市田 (1999<sup>55)</sup>) は、手話学習者の手話文における非手指動作について、特にうなずきに注目してその特徴を分析し、下方向へ頭部を動かすうなずきは生じやすいが、始めに上方向に動かしたのち下方向へ動くうなずきについては学習されにくいことを明らかにしている。

また池田・木村・竹内・福田・市田 (1999<sup>16)</sup>) は、手話学習開始より 11ヶ月後の学習者の手話について、文頭、文中に表示される/PT 1/(1人称を示す指差し) に位置の誤りが多く出現すること、その他の単語については位置や手型より、むしろ運動に関する誤りが多く見られたこと、さらに日本語の発話リズムによる干渉が見られることなどを報告している。

こうした知見は同時通訳を考える上でも、通訳者の手話の評価においても取り入れるべき重要な視点ではないかと考えられる。

#### IV. 手話通訳研究の特徴

本研究では、音声同時通訳および手話通訳の研究成果を、量的側面、時間的側面、起点言語から目標言語への変換作業、訳出表現の 4 つの側面から概観してきた。

手話通訳について考える際、音声言語とは異

なる手話言語の特殊性を考慮に入れなければならないが、その特徴として主に以下の四点が指摘される。第一に、聴覚-音声モダリティを用いる音声言語に対して、手話は視覚-身振りモダリティの言語であり、音素を継時的に配列するだけでなく同時に結合することも可能となる。第二に、一般に「手話」と呼ばれているものには、音声言語とは異なった独自の文法体系をもつ「手話言語」と、その国の音声語の文法に即した「対应手話(同時法的手話)」、さらにその中間的な変種が存在する。日本の場合は、「日本手話」、「日本語対应手話(手指日本語)」、「中間的手話」がそれにあたる。第三に、手話の話者である聴覚障害者にはさまざまな言語的背景をもった者がいる。例えば、聴覚口話教育により音声語を第一言語とし、音声語対应手話を主なコミュニケーション手段とする者もいれば、手話言語を主要なコミュニケーション手段とする者もいる。第四に、手話には定まった記述法がなく、文法の解明も研究途上である。以上のような手話言語の特殊性を踏まえた上で、音声同時通訳と比較した手話通訳の特徴および今後の手話通訳研究の方向性について考察する。

まず、音声同時通訳研究と比べ手話通訳研究は、研究の数がきわめて少ない。そのため、手話通訳の分野では、まだ一致した見解が得られている項目は少ないが、現時点での手話通訳の特徴を述べると以下のような点が挙げられる。

##### 1. 量的側面

若松 (1989 a<sup>59)</sup>; 1989 b<sup>60)</sup>) は、手話通訳の訳出率は起点談話の冗語や反復表現を除いて比較した場合で 60%程度であったとしており、音声同時通訳の 72.3% (小栗山, 2000<sup>27)</sup>) と比較して低い値を報告している。しかしながら、若松 (1989 a<sup>59)</sup>; 1989 b<sup>60)</sup>) では、分析の際に起点談話と訳出表現の間の厳密な一致を求めており、また訳出表現として手話独自の特徴と考えられる非手指動作や空間モダリティの活用については考慮に入れられていないことから、このような値が出たとも考えられる。そのため、訳出率



の算出にあたっては、手話の特徴を十分に考慮に入れるとともに、音声同時通訳研究でも議論があるように、日本語と手話の形式的な対応を求めるのではなく、手話によって伝達された内容の量を客観的に把握できる指標を見いだす必要があると考えられる。

## 2. 時間的側面

時間的側面からの分析として、音声同時通訳ではタイムラグから見た処理単位の大きさと、聴取と産出の同時性の二つの側面から研究が行われていた。これに対して手話通訳では、タイムラグに関する研究はあるものの、聴取と産出の注意の配分に関しては扱われてきていなかった。

タイムラグの大きさについては、手話通訳の場合平均1.3秒(若松, 1990 a<sup>61)</sup>)、音声同時通訳の場合1.29から3.80秒(Barik, 1969<sup>2)</sup>)であったことが報告されており、手話通訳の方が若干タイムラグが短くなっていた。これは、先に述べた日本語対応手話の存在が関係しているものと推察される。すなわち、日本語対応手話は、日本語の語順にそって手話単語を配列するものであり、起点言語である日本語と近い形態を持つため、通訳の際の処理が比較的容易であると考えられる。したがって、このことがタイムラグや処理単位の大きさに影響を与えたものと推察できる。

また、処理単位については、入力される語を一定時間保存して訳出する場合と、即座に訳出する場合の二通りの方略が存在することが報告されており(若松, 1990 b<sup>62)</sup>)、これについては音声同時通訳と共通している点であろう。

## 3. 起点言語から目標言語への変換

起点言語から目標言語への変換の際には、音声同時通訳と同様、省略、付加、置換などの操作が行われていることが指摘されていた(Cokely, 1992<sup>10)</sup>)。しかし、手話の大きな特徴である空間モダリティの使用については、未だ十分に検討されておらず、これが通訳作業にどのように影響しているのかについては明らかにされていない。

また、文レベルの変換作業については、音声同時通訳研究では、起点言語と目標言語の組み合わせによって、求められる作業内容が異なることが指摘されていた。したがって、手話通訳においては手話の特徴がより強く反映される側面であると考えられ、今後の研究が待たれる部分である。

## 4. 訳出表現

訳出表現については、音声同時通訳においても十分な分析がされていないが、手話通訳の場合、特に、通常手話通訳者によって用いられる中間的手話は、日本語と日本手話の両方の特徴を併せ持つものであり、両者の文法をどのように取り入れるかによって多くの表現形態が存在する。そのため、手話通訳者の訳出表現を分析する際には、中間的手話の扱い方が問題となる。

また、受け手である聴覚障害者のコミュニケーションニーズが多様であることも手話通訳の大きな特徴である。したがって、聴覚障害者の手話通訳に対する評価と客観的な手話通訳の分析結果との関係を、聴覚障害者のコミュニケーションニーズを考慮しながら検討する必要があるだろう。

## V. おわりに

通訳研究の多くは、起点談話と訳出表現の内容とを書き起こし、これらを比較する形をとっている。しかし、手話通訳研究の際問題となる点として、手話の記述法が定まっていない点が挙げられる。これまでに開発されてきた手話の表記法には、ストーキー法(Stokoe, Dorothy, Carl, 1965<sup>53)</sup>)、サットン法(Sutton, 1978<sup>55)</sup>)などがあり、我が国においても、日本手話の表記法確立のために、研究が進められているが(Kato, 1987<sup>23)</sup>; 本名・神田・小田・加藤, 1984<sup>16)</sup>など)、まだ一致した見解が得られていない。また、手話の文法研究で一般的に使用されている方法に、手話単語の日本語訳のうち代表的なもの1つをその手話単語のラベルとして用いて記述し、必要に応じて補助記号を用いる方法がある(Baker & Cokely, 1980<sup>1)</sup>; 神田, 1994<sup>22)</sup>;

市田, 1998<sup>19)</sup>など)。しかし、この方法も通訳の分析において重要な、非手指動作の記述を十分に行えないという問題点が存在する。そのため、手話通訳の分析においてはこれらの記述法の限界を考慮に入れ、これを補う方法を考案する必要がある。

また、通訳研究全般にいえることとして、用語の問題が挙げられる。本稿では通訳の元になる言語を「起点言語」、起点言語の中で通訳の対象となる談話を「起点談話」とするとともに、これに対応する語として、「目標言語」「訳出表現」という用語を用いた。しかし、これらの用語は研究者間で統一されておらず、特に通訳の元になる題材を表す用語は、それぞれの研究における分析の単位や方法によって、起点言語、起点談話、起点言語テキスト、原文、オリジナルメッセージなどさまざまな用語が用いられており、いずれもその意味範囲や指し示す内容について統一見解が得られていない。同様に、「訳出」という用語も、用いられ方によって意味範囲が変わり、厳密な定義が定まっていない。このような用語は、いずれも通訳作業を分析する上で非常に重要な語であるため、今後研究者間でさらなる議論が必要であると言える。

## VI. 引用文献

1. Baker, C. and Cokely, D. (1980) *American Sign Language: A teacher's resource text on grammar and culture*. Linstok Press, Silver Spring.
2. Barik, H. C. (1969) A study of simultaneous interpretation. Unpublished doctoral dissertation, University of North Carolina, Chapel Hill.
3. Barik, H. C. (1971) A description of various types of omissions, additions and errors of translation encountered in simultaneous interpretation. *Meta*, 16, 199-210.
4. Barik, H. C. (1973a) Simultaneous interpretation: temporal and quantitative data. *Language and Speech*, 16, 237-270.
5. Barik, H. C. (1973b) Simultaneous interpretation: Qualitative and linguistic data. *Language and Speech*, 18, 272-297.
6. Brasel, B. B. and Brasel, K. E. (1974) The R. I.D. scoring system and how it works. *Journal of rehabilitation for the deaf*, 7(3), 76-79.
7. Brasel, B. B., Montanelli, D. S., and Quigley, S. P. (1974) The component skills of interpreting as viewed by interpreters. *Journal of Rehabilitation for the Deaf*, 7(3), 20-27.
8. ビュテル延増崇子 (1997) フランスの大学期間における会議通訳者養成. 東京外国語大学大学院修士論文.
9. Cokely, D. (1986) Effects of lag time on interpreter errors. *Sign Language Studies*, 53, 341-376.
10. Cokely, D. (1992) *Interpretation: A sociolinguistic model*. Linstok Press, Silver Spring.
11. Davidson, P. M. (1992) Simultaneous interpreting research: past, present and future. *Interpreting Research*, 3, 23-42.
12. Fleischer, R. and Cottrell, M. (1976) Sign language interpretation under four interpreting conditions. Murphy, H. J. (Eds.) *Selected readings in the integration of deaf students at CSUN, California State University, Northridge, Center on Deafness*.
13. Gerver, D. (1971) Aspects of simultaneous interpretation and human information processing. unpublished doctoral dissertation, University of Oxford, Oxford.
14. Gile, D. (1994) Predictable sentence endings in Japanese and conference interpretation. *Interpreting Research*, 6, 9-25.
15. Goldman-Eisler, F. (1972) Segmentation of input in simultaneous translation. *Journal of Psycholinguistic Research*, 1(2), 127-140.
16. 本名信行・神田和幸・小田候朗・加藤美保子 (1984) 手話の表記法について. 手話学術研究会論文集, 7, 1-11.
17. 船山仲也 (1985) 同時通訳の諸側面. 視聴覚外国語教育研究, 8.
18. 池田亜希子・木村晴美・竹内かおり・福田友美子・市田泰弘 (1999) 手話を学習する上でエラーの多かった単語の音韻的特徴. 日本

- 手話学会第25回大会予稿集, 80-81.
19. 市田泰弘 (1998) 日本手話の文法. 言語, 27(4), 44-63.
  20. Jhonson, K. (1991) Miscommunication in interpreted classroom interaction. *Sign Language Studies*, 70, 120-161.
  21. 亀井千秋 (1998) 日英同時通訳実証研究. 通訳理論研究, 14, 96-103.
  22. 神田和幸 (1994) 手話学講義—手話研究のための基礎知識—. 福村出版.
  23. Kato, M. (1987) A study of sign language writing system. 日本手話学術研究会論文集, 8, 13-38.
  24. 木佐敬久 (1997) 「放送通訳の日本語」受け手調査と話す速度の研究. 文部省科学研究費「国際社会における日本語についての総合研究」報告書, NHK 放送文化研究所.
  25. 木佐敬久 (1998) 放送通訳の聞きやすい速度とは?—ビデオ調査による視聴者の反応—, 放送研究と調査, 48(3), 40-63.
  26. 木佐敬久 (1999) 放送通訳の聞きやすい速度の研究—ビデオ調査による視聴者の反応—. 文部省科学研究費「国際社会における日本語についての総合研究」報告書, NHK 放送文化研究所.
  27. 小栗山智 (2000) 放送通訳の訳出率—同時通訳と時差通訳の訳出率の比較研究—. 輔仁大学修士論文.
  28. 近藤正臣 (1994) 初期の同時通訳研究—Henri Barik の場合(1). 通訳理論研究, 6, 43-53.
  29. Livingston, S., Singer, B., and Abrahamson, T. (1994) Effectiveness compared: ASL interpretation vs. transliteration. *Sign Language Studies*, 82, 1-54.
  30. 水野 的 (1993) 放送通訳の理論的課題 II. 通訳理論研究, 4, 31-37.
  31. 水野 的 (1995) 日英同時通訳ノート. 通訳理論研究, 9, 4-21.
  32. 水野 的 (1997) ヨーロッパの最新通訳理論. 言語, 26(9), 40-46.
  33. Murphy, H. J. and Fleischer, R. (1976) Effectiveness compared with test score of ASL interpretation and transliteration. Murphy, H. J. (Eds.) *Selected readings in the integration on deaf students at CSUN, California State University, Northridge, Center on Deafness*.
  34. 永田小絵 (1994) 日本語から中国語への同時通訳分析. 通訳理論研究, 7, 9-12.
  35. 永田小絵 (1996) 通訳訓練の外国語学習への応用. 通訳理論研究, 11, 45-54.
  36. 永田小絵 (1997a) 日中同時通訳の伝達可能性とその限界について. 東京大学大学院総合文化研究科修士論文.
  37. 永田小絵 (1997b) 同時通訳・訳出の比較. 通訳理論研究, 13, 4-23.
  38. Nida, E. A. (1961) *Bible translating: an analysis of principles and procedures, with special reference to aboriginal languages*. United Bible Societies, London. 沢登春仁 升川潔訳 (1973) 翻訳: 理論と実際. 研究社.
  39. 新崎隆子 (1996) 通訳の評価について. 通訳理論研究, 11, 55-65.
  40. 日本手話通訳士協会 (1994) 手話通訳者・奉仕員の養成・派遣委員会制度に関する調査及び手話通訳士実態調査報告. 日本手話通訳士協会.
  41. 西村知美 (1996) 大学における通訳授業の問題と今後の方向性. 通訳理論研究, 10, 63-77.
  42. Nishio, M. (1986) A brief introduction to the mechanics of simultaneous interpreting with special reference to Japanese-English interpretation. *The Language Teacher*, 10(2), 4-12.
  43. 小田侯朗 (1987) 手話通訳における日本語情報の表現様式変容に関する研究. 国立特殊教育総合研究所研究紀要, 14, 91-98.
  44. 岡野美津子 (1999) 「放送通訳」における情報の選択性—「重要性」の観点からの分析. 大阪大学大学院言語文化研究科修士論文.
  45. Riekehof, L. L. (1974) Interpreter training at Gallaudet college. *Journal of Rehabilitation for the Deaf*, 7(3), 47-52.
  46. Rudser, S. F. (1986) Linguistic analysis of changes in interpreters' language 1973-1985. *Sign Language Studies*, 53, 332-340.
  47. Rudser, S. F. and Strong, M. (1986) An examination of some personal characteristics &

- abilities of sign language interpreters. *Sign Language Studies*, 53, 315-331.
48. 佐伯哲夫 (1975) 現代日本語の語順. 笠間書院.
  49. Shaw, R. (1987) Determining register in sign-to-English interpreting. *Sign Language Studies*, 57, 295-322.
  50. 染谷泰正 (1996a) 日本における通訳者訓練の問題点と通訳訓練に必要な語学力の基準. *通訳理論研究*, 10, 46-58.
  51. 染谷泰正 (1996b) 通訳訓練の手法とその一般語学学習への応用について. *通訳理論研究*, 11, 27-44.
  52. Stokoe, W. C., Casterline, D. C., and Croneberg, C. G. (1976) *A dictionary of American Sign Language on linguistic principles*. Linstok Press, Silver Spring.
  53. Strong, M. and Rudser, S. F. (1986) The Subjective Assessment of Sign Language Interpreters. *Sign Language Studies*, 53, 341-376.
  54. Sutton, V. (1978) *Sign writing for everyday use*. The Center for Sutton Movement Writing.
  55. 竹内かおり・木村晴美・池田亜希子・福田友美子・市田泰弘 (1999) 学習者の手話文におけるうなずきのエラー. *日本手話学会第25回大会予稿集*, 84-87.
  56. Taylor, C. and Elliot, R. N. (1994) Identifying areas of competence needed by educational interpreters. *Sign Language Studies*, 83, 179-190.
  57. 鳥飼玖美子 (1996) 日本における通訳教育の可能性. *通訳理論研究*, 13, 39-53.
  58. 若松利昭 (1989a) 手話の情報伝達機構について2. *日本福祉大学研究紀要第2分冊*, 78, 7-84.
  59. 若松利昭 (1989b) 手話の情報伝達機構について3. *日本福祉大学研究紀要第2分冊*, 79, 82-49.
  60. 若松利昭 (1990a) 手話の情報伝達機構について4. *日本福祉大学研究紀要第1分冊*, 81, 191-203.
  61. 若松利昭 (1990b) 手話の情報伝達機構について5. *日本福祉大学研究紀要第1分冊*, 84, 110-89.
  62. 若松利昭 (1991) 手話の情報伝達機構について6. *日本福祉大学研究紀要第1分冊*, 85, 100-88.
  63. 八島智子 (1985) 通訳術の分析. 河野守夫・沢村文雄編, *Listening & Speaking—新しい考え方*, 176-193.
  64. 全日本聾啞連盟 (1985) 手話通訳制度調査検討報告書. 全日本聾啞連盟.
  65. 全日本聾啞連盟 (1986) 手話通訳認定基準等策定検討委員会中間報告. 全日本聾啞連盟.
  66. 全日本聾啞連盟 (1988) 手話通訳士 (仮称) 認定基準等に関する報告書. 全日本聾啞連盟.
  67. 全日本聾啞連盟 (1998) 手話通訳の理論と実際. 全日本聾啞連盟.
  68. 全日本聾啞連盟・日本手話通訳士協会・公正証書遺言問題弁護団 (1998) 民法969条改正をめざして—公正証書遺言と聴覚障害者—.

## **A Review on the Study of Japanese – Sign Language Interpretation : Contrast with Studies on Simultaneous Interpretation of Spoken Languages**

**Mayumi SHIRASAWA and Sawa SAITO**

Most studies in sign language interpretation have focused on the outcome of interpretation, that is, the feature observed in signing performances, the impression of the viewers of the sign, and other aspects. This study focused on the processes of sign language interpretation and reviewed literature, on the performed during sign language interpretation, contrasting with the studies on simultaneous interpretation of spoken languages.

The results indicated that sign language interpretation has similar characteristics to simultaneous interpretation of spoken languages, such as paraphrasing and additions, and differences in processing units. This shows that analytical method used in spoken language interpretation could be used in the analysis of sign language interpretation. In the analysis, however, adequate attention has to be paid to the unique aspects of sign language, such as the existence of Signed Japanese and usage of spatial modality.

**Key words :** Sign Language, Simultaneous Interpretation, Interpretation task, Hearing impairment